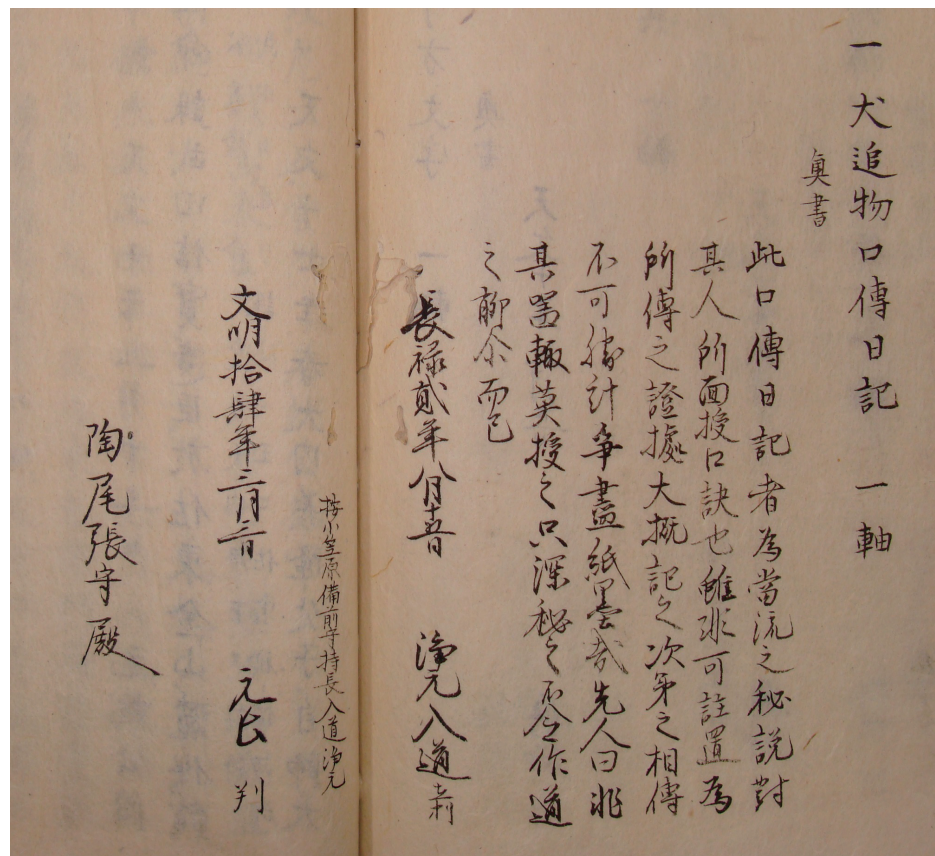


犬追物（いぬおうもの）



*毛利家文庫 15文武11「騎射紀事料案」

解説

鎌倉時代の武士は、日頃から武芸の訓練に励みました。この訓練として笠懸・流鏑馬とともに行われたのが、走る犬を馬上から射る犬追物です（騎射三物）。馬上の弓術は武芸の中でも最高位のものとされ、なかでも犬追物は広い土地や多くの人馬に加えて数多くの犬の準備が必要だったため、有力な武士のあいだで行われました。

室町時代になると犬追物はしだいに定型化し、また小笠原流などの流派の「口伝」（くでん。秘伝を師が弟子に直接伝授すること）が行われました。写真は、小笠原流犬追物の「秘説」が1482（文明14）年に陶尾張守（弘護）に対して伝授され、その大略を記した記録が与えられたことを示すもので、その記録の原本は防府市の毛利博物館に現存します。陶氏の本拠地であった富田保（現周南市）には「犬の馬場」という地名もあり、陶氏と犬追物の関係がしのべれます。

大内氏もさかんに犬追物を行いました。16世紀の大内義隆の時代になると、しだいに娯楽色の強い競技となっていたようです。

*「犬の馬場」地名は当館の徳山毛利家文庫 打渡帳30「防州都濃郡富田保打渡坪付 五」（1622（元和8）年）や同57「寛永御打渡牒」（1626（寛永3）年）に見えますが、その後は見えなくなります。防長の犬追物は毛利氏の時代になって廃絶しました。